

子供たちの「人間力」を育むために
～教師と企業人が交流し共に学ぶ～

提 言

平成 29 年 4 月

富山経済同友会
教育問題委員会

目 次

I	はじめに ～子供たちの「人間力」を育むために～	P1
II	子供たちに「人間力」は育まれているのか	P2
III	「とやまの教育」のあるべき姿と、 富山経済同友会の今後の取組みの方向	P4
IV	提言：「とやまの子供の「人間力」育成プラン」の実践	P6
V	おわりに	P9
VI	<参考>これまでの活動状況等	P10

I はじめに

～子供たちの「人間力」を育むために～

日本の学力レベルは、経済協力開発機構(OECD)の2015年の学習到達度調査(PISA)によると、各教科において世界トップレベルを維持している。このことは、日本や本県の教育界と現場を預かる教師のたゆまぬ努力の結果であると高く評価できるものである。

しかし、今日の学力偏重社会において、政治・経済のグローバル化や第4次産業革命などの国内外の急速な社会変化に対応し、逞しく生き抜くことができる子供たちを育む教育が、果たして十分に行われていると言えるであろうか。

富山経済同友会は、平成10年度に第1次「教育問題委員会」を発足させて以来第9次委員会に至るまで、富山県教育発展のため「企業人として如何に教育に関わってゆくののか」という一貫した理念のもと、教育界などと協力した様々な具体的実践活動を展開してきた。その中で、教育現場の貴重な意見や活動の成果を得る一方、教育現場を取り巻く様々な課題についても認識し、それらに対する取組みの方向性を模索、実践してきた。

我々は、これまでの学校や教師との連携活動から得られた知見をもとに、教育現場と教師により一層積極的に関わり、教師と企業人が交流し、連携・協力する中でともに学び、今こそ、子供たちに、変化の激しい社会を逞しく生き抜く「人間力」が育まれるよう、何ができるのかを真摯に考え、効果的な取組みを推し進めていくための方策をここにまとめ、教育界と経済界に向けて提言するものである。

Ⅱ 子供たちに「人間力」は育まれているのか

富山経済同友会がこれまでの活動を通じて認識を深めた、子供たちや教師の現状について、以下に整理する。

(1) 子供たちの「人間力」とは

子供たちが生きていくために必要なものとは、学校で教えられた知識や技術だけではない。変化の激しい社会において、困難に直面してもそれに果敢に立ち向かい、決してあきらめずに最後まで課題解決にチャレンジする力、自分たちがよりよく生きていくために必要なことを自分で考え行動する力、これこそが、子供たちに必要な「人間力」であると考えている。

(2) 子供たちや教師の現状

日本の学力レベルは総じて世界トップレベルを維持しており、学校における「教師が勉強を教えるレベル（授業力）」は高い。

しかし、今日の学力偏重の教育においては、将来を担う子供たちをどのような人間に育てていくのかということよりも、知識を教え、その記憶量を評価することが重視されている。これは、決まったことを記憶させる点で優れてはいるものの、子供たちが、習ったことを実生活の場面で現実に適用し、自分の頭で考え、応用できるという、まさに「人間力」を育むための教育は、十分に行われているとは言えないのではないだろうか。

そもそも、日本における学力偏重主義は、学力重視で評価する現在の大学入試制度の影響によるものと考えられる。反面、文部科学省は、「生きる力」の3要素（確かな学力、豊かな人間性、健康・体力）がこれからの社会を生きる若者に必要であるとしており、現状の大学入試制度が重きを置く学力重視の方針と大きくズレが生じていると言えよう。

一方、米国のハーバード大学などいわゆる世界の一流と言われる高等教育機関の多くが、入学試験において学力以外の社会貢献・ボランティア活動や文化活動、スポーツなどの実績を入学審査の評価に取り入れており、人間の可能性が多面的に評価されている。

教育現場を担当する教師は、より多くの子供たちの大学入試突破が至上命題である以上、大学入試制度に合わせた教え方をせざるを得ない。このため、教師は、子供たちの「人間力」を育むための教育の必要性を感じ、それを実践したいという思いはあるものの、そのノウハウを得るための研修の機会や、自らの人間的魅力や見

識を高めるための、学校外の社会との関わりを持つ機会は、少ないのではないだろうか。

また、社会の急速な変化への対応や、保護者等からの期待の高まり等を背景として、教師は多くの業務を抱えており、「教師の多忙化」が急速に進行している。加えて、いじめや不登校といった、学校現場における様々な課題に対応することに多くの時間と労力を割かれ、日々子供と接し心を通わせ、人間同士の信頼関係を育む中で子供の人格形成に関わっていくという、教師の大きな使命を果たすことが難しくなっていることも大きな問題である。

こうしたことから、教師も子供たちも時間に追われ余裕をもてず、教師と子供たちが心を通わせる機会が持ちにくい状況にあると考える。このような現状に、教師は少なからずもどかしさを抱いているのではないだろうか。

(3) 社会が求める人間像とのギャップ

その結果、学校教育を通して子供たちが身に付けてきた知識重視の人間像と、社会が求める人間像、すなわち、知識のみならず、高い志を持ち、自ら主体的に判断し行動する能力などを併せ持つ、まさに「人間力」を持った人間像とがかけ離れ、このことはまた、早期離職、ニートやひきこもりの増加の要因ともなっているのではないかと考えられる。

Ⅲ 「とやまの教育」のあるべき姿と、富山経済同友会の今後の取組みの方向

Ⅱにおいて、子供たちの「人間力」について、その現状と課題を考察した。これを踏まえ、次に、とやまの教育のあるべき姿はどのようなものなのか、また、課題を解決するために、今後、富山経済同友会はどのような方向で取組みを推し進めるべきなのかについて整理する。

1 「とやまの教育」のあるべき姿

子供たちに「人間力」を育むために、教師と企業人との連携・協力関係が構築され、定期的な交流の場において効果的な研修が実施され、さらに、教育現場での課題が共有化されており、その解決に向けての取組みが、継続的になされている。

また、海外教育事情視察をはじめ、当会と連携して実施する事業に参加した教師がリーダーとなり、教育現場での意識改革が図られ、子供たちに質の高い授業を提供している。

こうした成果の積み重ねにより、学校において、確かな学力のみならず、豊かな人間性、健康・体力が育まれ、社会の求める「人間力」を身に付けた子供たちがいきいきと社会へ羽ばたいている。

このような教育を形づくることが理想かつ必要不可欠であり、そのために、我々とやまの企業人が、「とやまらしい」方法で教育界に支援・協力できる途を探る。

2 富山経済同友会の今後の取組みの方向

現在の教育現場がかかえる様々な課題を解決し、社会が求める人間像とマッチする「人間力」を持つ子供たちを育むためには、何が必要なのか。

子供たちは、社会から学び、これからの人生を逞しく生き抜くための力を身につける必要がある。そのためには、教育者である教師自身が、社会と積極的に交流し、学校と社会との距離を縮め、社会で必要とされる人間像をしっかりと描き、子供たちの教育に向き合わなければならない。教師は、高い授業力を持ち、子供たちの学力を育むために日々努力を重ね、子供たちの学力レベルを支えているが、子供たちの「人間力」を育むためには、さらに、教師自身が、自身の「人間力」をもっと高めていくことも必要であると考える。

教師の「人間力」とは、言い換えれば、幅広い社会的見識に基づく実践的な指導力を備え、教育に対する熱い情熱と人間的魅力にあふれ、子供たちからだけでなく保護者や地域の人々からも信頼される力量、すなわち総合的な「教師力」を指すものとする。我々は、この「教師力」の向上こそ、子供たちの「人間力」を育むための重要な鍵になると考える。

我々企業人は、多忙化している教師の現状に配慮し、負担と効果のバランスに留意しつつ、教師と学び合い、一体となって効果的な取組みを実践することにより、「教師力」の向上、ひいては「人間力」を身に付けた子供たちの育成を目指す。

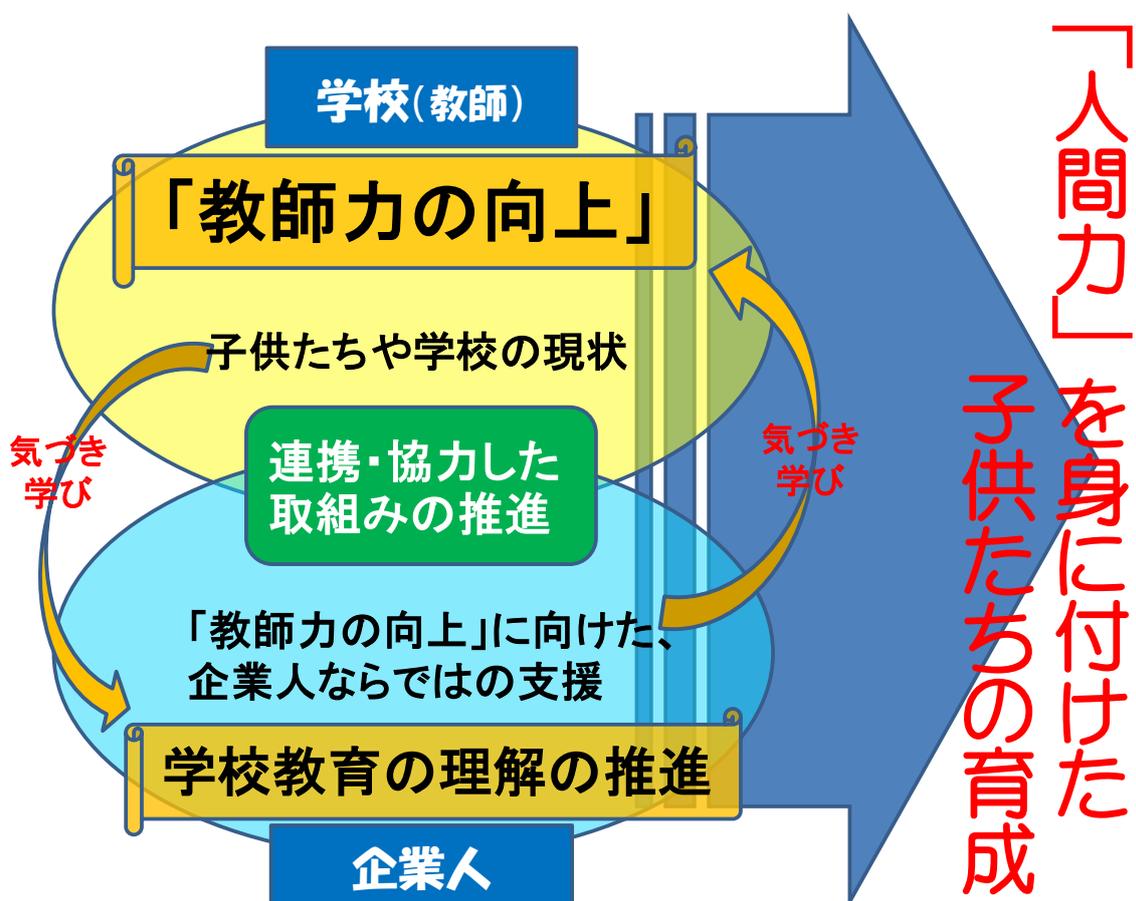
そのために、我々は、これまでの富山経済同友会の活動から得られた知見をもとに、教師と連携・協力し、企業人との交流を通じてこそ得られる気付きや学びにより、教師自身の「人間力」すなわち「教師力」の向上を支援する。また、我々企業人であっても、継続的に教師と交流することにより、教師から子供たちや学校の現状を学び、教師との共通認識を持つよう努める。

IV 提言：「とやまの子供の「人間力」育成プラン」の実践

富山経済同友会は、企業人としての立場から、教師と連携・協力しながら、「人間力」を身に付けた子供たちを社会に送り出すことを目的とした「とやまの子供の「人間力」育成プラン」を実践することを提言する。

「とやまの子供の「人間力」育成プラン」とは、我々企業人と教師が交流し、学び合い、一体となって、「人間力」を身に付けた子供たちの育成を目指し取組む、次のような仕組みをいう。

- ①我々富山経済同友会独自の取組みである海外教育事情視察をはじめとする、教師と企業人とを結びつける「異分野」での人的交流等を通じ、教師が、企業人と交流するからこそ得られる気づきや学びにより「教師力の向上」を図る。
- ②我々企業人も、教師から、子供たちや学校の現状を学び、教育現場への理解を深め、教師との共通認識を持つ。



図：「とやまの子供の「人間力」育成プラン」のイメージ

「とやまの子供の「人間力」育成プラン」で取り組む具体的事項

○視察参加者等による定期的な“議論”（ディベート）の場の創出

本会会員と教育事情視察や経済同友会教育関係委員会交流会等の参加教師との研修会や交流の場を定期的に行う。視察参加者を核として幅広く参加を募り、教育現場の様々な問題点やテーマを抽出し解決策を考える場とする。

研修会では、単なる「意見交換」だけでなく、教師と我々企業人が、一つの問題についてディベートを行い、議論を深め、自己表現力や論理的思考力を磨く。

ディベートは、単なる知識の詰め込みではない、子供たちにとって、世の中のあらゆる場面で役に立つ実践力が養われる有効な手段である。やがては、学校の授業においても取り入れられるよう、教師自身がディベートをまず経験することで、子供たちへの指導力を向上させることを目指す。

実施にあたっては、まず当会教育問題委員会において教育現場の意見を踏まえて、より効果的な実施方法を研究するものとする。

○教師向けの教育講演会を拡充した「課外交流」の実施

学校の管理職をはじめ、若手・中堅教師向けに実施している講演機会を拡充し、一方的な講義だけでなく、積極的に教師と我々が交流し、教師から、子供たちや学校の現状を学んだり、教師の抱える悩みや疑問なども聞かせてもらう「課外交流」の場を創出する。

○経済同友会教育担当委員会交流会への教師の参加促進

栃木県、群馬、新潟、中部と富山の5経済同友会の教育問題を担当する委員会が、教育先進事例や教育問題について学び、意見交換や情報交換を行い、連携・交流を深めることを目的とした「経済同友会教育担当委員会 交流会」が、平成25年度に富山で第1回を開催して以降、5同友会持ち回りで毎年開催されている。

現在も、5同友会で唯一富山県が、会員（教育問題委員会委員）だけでなく現役教師（4名程度）も参加しているが、この参加人数を増員し、他県の先進事例を学び、企業人とも幅広く交流できる機会をより多くの教師に提供する。

また、現在未参加の各都道府県の経済同友会にも教育担当委員会交流会への積極的参加を呼びかけ、より多くの教師と企業人が交流し学び合う場を創出するよう努める。

○海外教育事情視察等の推進

我々とともに教師が参加し実施している、海外教育事情視察等の視察を引き続き推進し、教師と企業人が異国の教育や歴史・文化に触れ、教師としての視野を広げ、今後の教育実践に役立ててもらおう機会を提供する。

また、多様なキャリア教育を実践するきっかけとするため、新たに、商・工業高校教師等が、海外企業を訪問して先進的なモノづくりの現場視察を行う機会も設けるよう検討を進める。

○課外授業の一層の充実

従来実施してきた課外授業、すなわち企業経営者や管理職による「夢や目標を実現すること」や「働くことの意義」、「社会貢献の大切さ」を伝えるキャリア教育を、小学校・中学校・高等学校などの発達段階に合わせて更に推進する。

また、会員の講師リストへの登録を促進することにより、各分野に関する専門分野の講演枠（工業、科学、化学、建設、芸術、文化、ICT、金融、環境、社会等）の新設を検討し、各企業における専門職員や技術系職員が講師となり、富山県企業が有する専門分野の技術や知識・サービスが、いかに社会に貢献しているかについて、子供たちに認識を深めてもらうこととする。

○若手・中堅教師による「教師の挑戦」の検討

現在、中学2年生が実施している「14歳の挑戦」の教師版ともいえる、「教師の挑戦（仮称）」を実施し、教師の職場体験の機会を創出することを検討する。

これにより、教師が教育界以外の人脈と社会的見識を広めるとともに、社会が求める人材育成やそのために必要とされる学校教育や教師像を外部から見つめなおす機会とするとともに、企業が教師や学校への理解を深める機会とする。

○教師向け「県内企業訪問」の実施

教師に対して、富山県のものづくり企業をはじめとする先端技術や伝統産業の現場を視察研修してもらい、企業人との意見交換や交流の機会を創出し、教師が社会的見識を深めると共に企業への理解を促進する。

V おわりに

富山経済同友会は、「教育の再生なくしてわが国の経済や社会の永続的な維持・発展」はなく、教育問題に取り組むことこそが我々の重要な使命であると考えます。

我々は、「とやまの子供の「人間力」育成プラン」の実践を通して、教師とともに学び合い、双方の人間力を高めることで「人間力」を持った子供たちを育成するための取り組みを継続して行きたい。

この提言を契機として、教師が教師らしくいきいきと輝き、未来を担う子供たちが「人間力」を育み、ふるさとの自然や歴史、風習や人々を愛し、富山から世界に羽ばたく逞しい人材へと成長してくれるよう、切に願うものである。

また、教育を取り巻く今日的課題に対して、学校や企業のみならず、地域、家庭、行政など様々な関係機関がそれぞれの果たすべき役割を明確にし、積極的に連携・協力し、教育問題の解決に向け行動して行きたいと考える。

結びに、第8次・第9次教育問題委員会の活動に対しご協力いただいた関係団体や当会会員、更には本提言に対して様々な助言や協力をいただいた関係各位に心から感謝を申し上げます。

VI <参考>これまでの活動状況等

1 これまでの活動状況

① 教育問題講演会の実施

NPO 法人ファザーリング・ジャパン代表理事の安藤哲也氏から、「イクボス推進による人材力・生産性の向上」と題して講演いただき、仕事と子育ての両立支援に対する会員の意識高揚を図った。

② 「伝えよう、“親心” 推進月間」

当委員会が平成 19 年度から設けている「伝えよう、“親心” 推進月間」の一環として、これまでの提言で呼びかけている家庭教育支援活動を啓発リーフレットに取りまとめ、全会員に配付するとともに、積極的な取組みを呼びかけた。

③ 親学勉強会

家庭における「親学」（親としての学び・親になるための学び）推進の意義や必要性について学ぶため、（一財）親学推進協会理事長である浦山哲郎（当委員会副委員長）が講師を務め、委員会メンバーを対象に「親学勉強会」を開催した。

④ 海外教育事情視察

平成 20 年度から「海外教育事情視察」を実施。県内の中堅現役教師に海外の教育現場等を視察する機会を提供することにより、今後の実践教育に役立ててもらうとともに、教師としての人間力と教育力の向上を期待するものである。中尾特別顧問と本委員会メンバーが同行し、経済界と教師との交流・連携を推進している。

平成 25 年度はドイツ・オーストリア・チェコ、平成 27 年度はアメリカ合衆国、平成 28 年度はフィンランド・デンマークを訪問し、現地の教育、芸術、歴史・文化や経済・社会事情などについて視察を行った。

⑤ 課外授業講師派遣

平成 12 年 3 月の提言「家庭教育を見なおす～子どもと共に親も学ぶ～」において、会員による具体的行動のひとつとして、課外授業の講師に積極的に参加することを提唱し、平成 13 年度から実施している。

会員有志がボランティアで小学校（高学年）、中学校や高等学校に赴き、人生の先輩としての体験談や働くことの意義などを伝えている。

今次実績は、14 校 14 人、平成 13 年度の開始以来のべ 222 校 267 人となった。

なお、児童・生徒向けの課外授業だけでなく、学校長等管理職や一般の教師らを対象とした研修会への講師派遣も実施した。(今次実績は、7校7人)

⑥課外授業オリエンテーション

課外授業講師のレベルアップのため、会員相互に学び合うとともに、現場の先生方からのリクエストを直接うかがう「課外授業オリエンテーション」を実施した。

⑦経済同友会教育担当委員会 交流会

栃木県、群馬、新潟、中部と富山の5経済同友会の教育問題を担当する委員会が、意見交換や情報交換を行い、連携・交流を深めることを目的として、「経済同友会教育担当委員会 交流会」が、平成25年度に富山で第1回を開催して以降、5同友会持ち回りで毎年開催されている。

平成25年度富山県、平成26年度群馬県、平成27年度新潟県、平成28年度には栃木県で開催され、当会からは教育問題委員会委員はじめ、県立学校教師(富山県のみ)も参加している。

⑧栃木県経済同友会・教育担当委員会との交流

平成25年10月2日に、栃木県同友会の社会貢献活動推進委員会を迎えて「栃木県・富山経済同友会 教育問題フォーラム」を開催。富山経済同友会が実施している「課外授業講師派遣」を主なテーマとし、その様子を収録したDVDにより紹介するとともに、「富山県教育の取組み」、「高校生のインターンシップの取組み」、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』の取組み」について、県教育委員会担当者から紹介いただいた。

⑨富山市立堀川小学校への視察

平成25年10月2日に、学校の現地視察会を実施した、授業参観や校長らと意見交換を行った。

⑩高等学校長協会との意見交換

平成25年10月2日に、富山県高等学校長協会役員らとの意見交換会を行い、学校現場の取組みや課題等について説明を受けた。

⑪小学校長会・中学校長会との意見交換

平成26年3月には、第4回委員会として、富山県小学校長会・中学校長会役員との意見交換を行った。

⑫北陸新幹線開業イベント

平成 26 年 3 月、教育問題委員会において、「『技術革新』を実感する旅」として、生徒参加・企画・体験型のイベントを企画。東京の宿舎では、久和代表幹事による講話をいただいた。

生徒自身が移動手段と経路をグループごとに選定し、北陸新幹線開業前日の 3 月 13 日に、富山から東京までを「しなの鉄道経由」や「ほくほく線経由」、「上越線経由」で、普通電車や路線バスを利用して 10 時間から 12 時間をかけて移動。翌日は、東京駅から北陸新幹線「かがやき」で帰路に就いた。鉄道の発展の歴史や、産業発展の歴史についても学び、富山に帰省してから、気づきや学びを発表した。

2 活動から得られた主な気づき・課題認識

【教師・学校に関して】

海外教育事情視察

- ・ 歴史的背景に起因する教育理念や教育制度の違いを学んだ。
- ・ 教育者が担う社会貢献について深く考える機会となった。
- ・ 人との関わり（繋がり）が幸せを与えてくれることを生徒に伝えたい。
- ・ 異国の文化や歴史を知ることによって、日本の文化や教育の素晴らしさやきめ細かさを再認識できた。
- ・ 日本では、多くの教師が部活動や書類作成に多くの時間をとられる中、あるべき教育を行えず苦勞をしている。海外では、教師とともに多くのボランティアスタッフが活動しており、教師の負担軽減が図られていた。
- ・ 米国の大学入試は、50%が学力で、50%はスポーツ、芸術、リーダーシップ等で評価されており、日本の入試制度とは大きく異なっていることを知った。
- ・ 日本の入試制度における評価基準は学力のみであり、「生きる力」の3要素（確かな学力、豊かな人間性、健康・体力）がこれからの社会を生きる子どもたちに必要だとする文科省の方針とミスマッチが生じている。
- ・ フィンランドでは、学力はあるが学校が嫌いという子が多いという状況に着目した学習指導要領改訂が行われた。また、幼稚園の時点で子どもの異常をチェック・早期介入することにより、不登校を予防していた。
- ・ 「生徒の立場に立って考える」ことが、教員の養成におけるポイントとされていた。
- ・ 教師が一方向的に話をするような授業は少なかった。

- ・全ての授業において、生徒たちが思考し討論する時間が設けられていた。
- ・フィンランドの教育改革では、「総合的な学習の時間」を設け、教科横断型の授業を展開すること、生徒間および教師生徒間の協働作業を組み込み、包括的に教えていくこと、ICT 授業を増やし学習環境を整えることが盛り込まれていた。
- ・ペアやグループでの議論形式の授業の中で、高いコミュニケーション能力が培われていた。自分の意見を持ち発言する力、相手の意見を聴く力、そしてそこから建設的に何かを共に生み出そうとする態度が身に付いていた。
- ・生徒たちは常に思考し、知識や意見を交換し、学び合いができていた。
- ・日本の子どもには、自ら問題を認識し解決する力が必要と感じた。
- ・教師と経済同友会の会員とが交流することで教師や教育現場に足りないものを学ぶことができた。
- ・視察や研修内容は大変充実したものであるが、限定的であり県内の教員全体の意識向上や教師力の底上げにはなかなか至らないのが現状。
- ・参加された先生方は、経営者との交流に興味と意義を感じており、外部の多様な人脈づくりや価値観の違う情報を求めているが、そのような機会は非常に少ないのが現状。
- ・今の教育の現場は、父兄や地域からの要求、情報化社会の進展、コンプライアンス徹底など様々な視点をベースに教育現場の問題に対応していかなければならず、本来先生が考えているあるべき教育が時間的、心に余裕がなく十分に実現できない状況にある。
- ・本事業を経験した教師と経済同友会が定期的に交流し協働することが大切。

経済同友会教育担当委員会交流会

- ・企業が求める人材など、教師が企業人から学ぶことは多く、異業種での交流は非常に意義がある。

【企業に関して】

課外授業

- ・課外授業はニーズが高く、一層の充実が必要。
- ・他県では高校や大学と協調して地元就職させるための講師派遣等が実施されており、最終的に若者を地元就職させることが大きな目的としているケースもあった。
- ・課外授業での生徒への話し方、子どもたちとのキャッチボールも大切である。

- ・ 特別支援学校の就業体験の受入れを企業に希望する。
- ・ ものづくり県である富山県においては、科学技術の進歩を実感し、科学技術を探求する体験型の授業が必要。
- ・ 富山県の発展の歴史について、ふるさと教育の観点からも発達の段階に応じて体験を通して学ぶ必要がある。
- ・ 地元企業の魅力を伝える仕掛けが必要。

< 課外授業オリエンテーションでの意見 >

- ・ 抽象的なことを言っても響かない。具体的な話の方が、子供たちの心に残る。
- ・ 課外授業は、中学校では「14歳の挑戦」時期前後に実施されることが多いが、3年生の進路選択の時期に行うのも意義がある。
- ・ 地元を愛する生徒も多く、将来地元で夢を叶えることを促すような講演を希望する。
- ・ 教師が伝えられない社会の仕組みや講師自身の経験などを、分かりやすく伝えてほしい。
- ・ 14歳の挑戦受入れ企業に対しては、受入れした生徒に対しどのようなことを学ばせてほしいのか要望してもよいのではないか。(教職員、保護者、地域の各種団体代表者、受入れ施設の担当者、企業関係者等により構成する「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」推進委員会が、受入れ企業への説明会や事後懇談会を行っている。)

その他

- ・ 教育は、学校だけで行うには限界が来ており、学校と企業との連携が重要になってきている。
- ・ 父親がなるべく子育てにかかわれるような働き方が重要。
- ・ みんなが帰りやすい、短時間で成果を出せる職場にする必要がある。
- ・ 職場の部下の事情を理解し思いやる「イクボス」の存在が必要。
- ・ 男性の育児休暇取得への理解がまだ十分には進んでいない。
- ・ 子どもに、疲れ切った大人の姿を見せて、大人はつまらないと思わせてはいけない。親の、子に接する姿勢のあり方を考えなければいけない。大人が明るく元気であることが必要。

3 参考資料

(1) これまでの取組み状況

区分 (委員長名) (活動期間)	提言タイトル	内 容
<p>第1次委員会</p> <p>(黒田 昭 委員長) (平成10・11年度)</p>	<p>家庭教育を見なおす ～子どもと共に親も学 ぶ～</p>	<p>○「家庭教育を見なおすフォーラム」の開催を提言</p> <p>○課外授業講師派遣制度の創設を提言</p> <p>○地域コミュニティ支援を提言</p> <p>○交流勉強会の実施を提言</p>
<p>第2次委員会</p> <p>(谷道 昭 委員長) (平成12・13・14年度)</p>	<p>21世紀にはばたく子どもたちのために ～続・家庭教育を見なおす～</p>	<p>○家庭でのふれあいの機会の創出を提言</p> <p> a 従業員やその配偶者の出産に際し、早い時期から子どもとの交流が深まるよう低年齢児用絵本を贈ること</p> <p> b 子どもの誕生日には、従業員に残業をさせない、又は夜勤を免除するなど子どもと一緒に誕生日を祝うことができるようにすること</p> <p> c 父親である従業員が積極的に育児に参加できるよう気兼ねなくタイムリーに休暇を請求し、取得できるような職場環境を整備すること</p> <p>○教員の企業での研修機会の提供を提言</p> <p>○「家庭教育を見なおすフォーラム」の開催</p> <p> 平成12年度 3回</p> <p> 平成13年度 1回</p> <p> 平成14年度 1回</p> <p>○課外授業講師派遣</p> <p> 平成13年度 6校へ11名を派遣</p> <p> 平成14年度 5校へ7名を派遣</p> <p>○交流勉強会の実施</p> <p> 平成12年度 1回</p> <p> 平成13年度 2回</p> <p> 平成14年度 5回</p>

区分 (委員長名) (活動期間)	提言タイトル	内 容
<p>第3次委員会</p> <p>(林 和夫 委員長) (平成 15・16 年度)</p>	<p>親として、企業人として ～続々・家庭教育を見 なおす～</p>	<p>○家庭でのふれあいの機会の創出 ・贈呈用絵本のリスト作成・提示 ・「家庭の日」の周知</p> <p>○「わが家のきまり」のすすめを提言</p> <p>○家庭教育を見なおすフォーラムの開催 平成16年度 1回</p> <p>○課外授業講師の派遣 課外授業オリエンテーション開催を提案 平成15年度 10校へ14名を派遣 平成16年度 12校へ15名を派遣</p> <p>○交流勉強会の実施 平成15年度 4回 平成16年度 10回</p>
<p>第4次委員会</p> <p>(高田 順一 委員長) (平成 17・18 年度)</p>	<p>伝えよう、“親心” ～家庭教育を見なおす IV～</p>	<p>○家庭でのふれあいの機会の創出 ・携帯版「わが家のきまり」カードの作成、配布 ・「子育て支援企業エントリー制度」登録推進</p> <p>○家庭教育を見なおすフォーラムの開催 平成18年度 1回</p> <p>○「家庭教育アドバイス講座 in 企業」実施の推進</p> <p>○従業員家族を対象とした社内見学会の呼びかけ</p> <p>○課外授業講師の派遣 平成17年度 20校へ24名を派遣 平成18年度 14校へ20名を派遣</p> <p>○課外授業オリエンテーションの実施 平成17年度 講師による講演 平成18年度 講師による講演</p> <p>○交流勉強会の実施 平成15年度 4回 平成16年度 10回</p>

区分 (委員長名) (活動期間)	提言タイトル	内 容
<p>第5次委員会 (藤井 久丈 委員長) (平成19・20年度)</p>	<p>企業人はオヤジ役 ～家庭や学校での教育 を支えよう～</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○家庭でのふれあいの機会の創出 「伝えよう“親心”推進月間」(8月及び9月)の設定 ○仕事と子育ての両立に関する調査の実施 平成19年度 ○家庭教育に関するフォーラムの開催 平成19年度 1回 ○課外授業講師の派遣 平成19年度 14校へ16名を派遣 平成20年度 16校へ16名を派遣 ○課外授業オリエンテーションの実施 平成19年度 講師による講演 平成20年度 講師による講演 ○交流勉強会の実施 平成15年度 4回 平成16年度 10回 ○海外教育事情視察の実施 平成20年度 フィンランド、デンマーク
<p>第6次委員会 (大橋 聡司 委員長) (平成21・22年度)</p>	<p>「生きる力」を育む教育 に向けて ～日本の国力の源泉 “公德心”の復活を 目指して～</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○家庭でのふれあいの機会の創出 「伝えよう“親心”推進月間」(8月及び9月)の設定 ○「家庭教育サポート宣言」の発表 平成21年度 ○「仕事と家庭の両立支援推進シンポジウム」の開催 平成21年度 ○「子どもたちに読んでほしい1冊」の募集・冊子と りまとめ 33冊 ○課外授業講師の派遣 平成21年度 14校へ14名を派遣 平成22年度 16校へ17名を派遣 ○課外授業オリエンテーションの実施 平成21年度 講師による講演 平成22年度 講師による講演 ○交流勉強会の実施 平成21年度 29回 平成22年度 34回 ○海外教育事情視察の実施 平成21年度 中国(瀋陽、上海)、台湾(台北)

区分 (委員長名) (活動期間)	提言タイトル	内 容
<p>第7次委員会 (高見 貞徳 委員長) (平成 23・24 年度)</p>	<p>「公共の精神を尊び、 『生きる力』を備えた 人間の育成のために～ 「教育は国家百年の大 計である～」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○家庭でのふれあいの機会の創出 「伝えよう“親心”推進月間」(8月及び9月)の設定 ○「教育問題の基本を学ぶ会」の開催 平成24年度 2回 ○「第21回経済同友会中央日本地区会議」の主管 平成24年度 ○「富山・新潟経済同友会教育問題委員会交流会」 への参加 平成24年度 ○課外授業講師の派遣 平成23年度 14校へ14名を派遣 平成24年度 22校へ25名を派遣 ○課外授業オリエンテーションの実施 平成23年度 講師による講演 平成24年度 パネルディスカッション ○交流勉強会の実施 平成23年度 29回 平成24年度 33回 ○海外教育事情視察の実施 平成23年度 ドイツ、スイス
<p>第8次委員会 (藤井 裕久 委員長) (平成 25・26 年度)</p>	<p>—</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○家庭でのふれあいの機会の創出 「伝えよう“親心”推進月間」(8月及び9月)の設定 ○「親学勉強会」の開催 平成25年度 ○栃木県同友会教育担当委員会との交流 平成25年度 ○県高等学校長協会等との意見交換 平成25年度(学校視察あり) 平成26年度 ○経済同友会教育担当委員会交流会 平成25年度 富山経済同友会主管 平成26年度 群馬経済同友会主管 ○課外授業講師の派遣 平成25年度 19校へ26名派遣 平成26年度 9校へ10名派遣 ○課外授業オリエンテーションの実施 平成25年度 パネルディスカッション 平成26年度 パネルディスカッション ○交流勉強会の実施 平成25年度 22回 平成26年度 31回 ○海外教育事情視察の実施 平成25年度 ドイツ、オーストリア、チェコ ○北陸新幹線開業イベント「『技術革新』を実感する電車 の旅」 平成26年度

区分 (委員長名) (活動期間)	提言タイトル	内 容
<p style="text-align: center;">第 9 次委員会</p> <p>(藤井 裕久 委員長) (平成 27・28 年度)</p>	<p>子供たちの「人間力」を育むために ～企業人とともに教師も学ぶ～ (案)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○家庭でのふれあいの機会の創出 「伝えよう“親心”推進月間」(8月及び9月)の設定 ○講演会の実施(「イクボス推進による人材力・生産性の向上」) 平成27年度 ○経済同友会教育担当委員会交流会 平成27年度 新潟経済同友会主管 平成28年度 栃木県経済同友会主管 ○課外授業講師の派遣 平成27年度 17校へ24名派遣 平成28年度 14校へ14名派遣 ○課外授業オリエンテーションの実施 平成27年度 パネルディスカッション 平成28年度 パネルディスカッション ○交流勉強会の実施 平成27年度 25回 平成28年度 16回 ○海外教育事情視察の実施 平成27年度 アメリカ合衆国 平成28年度 フィンランド、デンマーク

(2) 課外授業講師派遣実績

<平成27年度>

(敬称略)

回	開催日	学校	講師	演題
1	27.6.10(水)	射水市立新湊南部中学校 (2学年72名)	朝日建設(株) 取締役社長 林 和夫	「生きること、学ぶこと、働くこと」
2	27.6.12(金)	富山市立堀川中学校 (2学年327名)	(株)牧田組 取締役社長 牧田 和樹	「夢をかなえる」
3	27.7.1(水)	富山市立岩瀬中学校 (2学年120名)	(株)チューリップテレビ 専務取締役 山野 昌道	「人生を楽しくする3つのコツ」
4	27.7.8(水)	富山県立泊高等学校 (3学年117名)	(株)四十物昆布 取締役社長 四十物 直之	「社会で働くということ」
5	27.7.15(水)	射水市立新湊南部中学校 (2学年72名)	(学)浦山学園 理事長 浦山 哲郎	「『かなえる力』を磨く」
6	27.7.17(金)	富山市立速星中学校 (全学年947名)	(株)ユニオンランチ 取締役社長 遊道 義則	「志高く生きる」 ー英雄の旅に出よう！ー
7	27.7.17(金)	高岡市立戸出中学校 (2学年122名)	(株)牧田組 取締役社長 牧田 和樹	「夢をかなえる」
8	27.7.21(火)	高岡市立成美小学校 (5,6学年147名)	(株)牧田組 取締役社長 牧田 和樹	「富山で生まれ育った君たちへ」
9	27.9.15(火)	立山町立雄山中学校 (2学年289名)	大高建設(株) 取締役社長 大橋 聡司	「仕事と人間関係づくり」
10	27.10.3(土)	富山県立魚津高等学校 (1学年200名)	(株)新日本コンサルタント 取締役社長 市森 知明	「学習の目的を知ろう」 ー目的を知って努力を楽しくー
11	27.10.6(火)	高岡市立志貴野中学校 (2学年230名)	(株)牧田組 取締役社長 牧田 和樹	「夢の扉を開くために」
12	27.11.4(水)	富山市立和合中学校 (全学年381名)	(学)浦山学園 理事長 浦山 哲郎	「『かなえる力』を磨く」
13	27.11.9(月)	富山県立雄山高等学校 (1,2学年311名)	(株)牧田組 取締役社長 牧田 和樹	「しあわせになろう！」
14	27.12.2(水)	砺波市立出町中学校 (1学年235名)	日本海ガス(株) 取締役社長 新田 八朗	「これからの日本を担うみなさんへ」
15	28.2.9(火)	富山市立岩瀬中学校 (1学年96名)	(株)ユニオンランチ 取締役社長 遊道 義則	「志高く生きる」
16	28.2.16(火)	滑川市立寺家小学校 (6学年55名)	(株)牧田組 取締役社長 牧田 和樹	「富山で生まれ育った君たちへ」
17	28.3.9(水)	富山市立速星中学校 (1学年335名)	青山嵩法律事務所 所長 青山 嵩	「生き方を学ぶ」
			大高建設(株) 取締役社長 大橋 聡司	「働くとは」
			マンパワーセキュリティ(株) 代表取締役 尾山 謙二郎	「生き方を学ぶ」
			(有)ステップアップ 代表取締役 川合 紀子	「笑顔でチャレンジ、チェンジ、ステージアップ」 ～学びの先にあるもの～
			東京海上日動火災保険(株) 富山支店長 小西 孝久	「夢に向かって。今日から始めよう！」
			(株)インテック 常務執行役員北陸地区本部長 高瀬 幸忠	「変わる 変える」
			朝日建設(株) 取締役社長 林 和夫	「生きること、学ぶこと、働くこと」
			(株)若林商店 取締役社長 若林 啓介	「私の人生、私の仕事」

述べ17校24名

<平成28年度>

(敬称略)

回	開催日	学校	講師	演題
1	28. 6.7(火)	富山市立堀川中学校 (2学年315名)	(株)ユニオンランチ 取締役社長 遊道 義則	「働くということ、生きるということ ～志高く生きる～」
2	28. 6.8(水)	高岡市立高陵中学校 (全学年299名)	(株)牧田組 取締役社長 牧田 和樹	「夢をかなえる」
3	28. 6.24(金)	射水市立新湊中学校 (2学年93名)	(株)牧田組 取締役社長 牧田 和樹	「学ぶとは 働くとは」
4	28. 7.6(水)	高岡市立国吉中学校 (全学年83名)	(株)チューリップテレビ 専務取締役 山野 昌道	「人生を楽しく生きる3つのコツ」
5	28. 7.15(金)	高岡市立戸出中学校 (2学年122名)	(株)牧田組 取締役社長 牧田 和樹	「なぜ働くの？」
6	28. 9.9(金)	富山市立山室中学校 (2学年198名)	(株)牧田組 取締役社長 牧田 和樹	「働くとは」
7	28. 9.13(火)	高岡市立志貴野中学校 (2学年218名)	(株)牧田組 取締役社長 牧田 和樹	「生きることは働くこと」
8	28.10. 1(土)	富山県立魚津高等学校 (1学年200名)	大高建設(株) 取締役社長 大橋 聡司	「学ぶこと」
9	28.11.8(火)	高岡市立和合中学校 (全学年361名)	(株)牧田組 取締役社長 牧田 和樹	「よりよく生きる」
10	28.11.25(金)	富山県立富山高等支援学校 (全学年54名)	阪神化成工業(株) 取締役社長 高田 順一	「働くこと、生きること ～卒業後のよりよい人生のために～」
11	28.12.6(火)	氷見市立比美乃江小学校 (5,6学年151名)	(株)牧田組 取締役社長 牧田 和樹	「よりよく生きる」
12	28.12.13(火)	砺波市立出町中学校 (1学年215名)	大高建設(株) 取締役社長 大橋 聡司	「働くこと、学ぶこと、生きること」
13	29. 1.24(火)	富山市立藤ノ木小学校 (5,6学年290名)	(株)アイザック 取締役最高顧問 中尾 哲雄	「ふるさとは心の根っこ」
14	29.3. 22(水)	富山県立石動高等学校 (1学年160名)	大高建設(株) 取締役社長 大橋 聡司	「夢を持つこと」

述べ14校14名

(3) 教育問題委員会委員

(五十音順)

	氏名	会社名	役職
委員長	藤井 裕久	(株)藤井産業	取締役会長
副委員長	石坂 兼人	石坂建設(株)	取締役社長
副委員長	伊東 潤一郎	アイティオ(株)	取締役社長
副委員長	浦山 哲郎	(学)浦山学園	理事長
副委員長	川合 紀子	(有)ステップアップ	代表取締役
副委員長	高野 二郎	タカノ建設(株)	取締役社長
副委員長	館 直人	たち建設(株)	代表取締役
副委員長	毛利 一郎	(株)毛利地所	取締役社長
副委員長	山崎 義明	(株)山崎製作所	取締役社長
委員	四十物 直之	(株)四十物昆布	取締役社長
"	青山 嵩	青山嵩法律事務所	所長
"	板倉 均	(株)北日本新聞社	取締役社長
"	市森 友明	(株)新日本コンサルタント	取締役社長
"	稲葉 伸一	(株)三四五建築研究所	代表取締役
"	大橋 聡司	大高建設(株)	取締役社長
"	尾山 謙二郎	マンパワーセキュリティ(株)	代表取締役
"	片山 浩一	片山商事(株)	代表取締役
"	金森 米男	金森産業(株)	取締役社長
"	黒澤 敏	トヨタカローラ富山(株)	取締役社長
"	小西 孝久	東京海上日動火災保険(株)	富山支店長
"	米屋 慎一	北星ゴム工業(株)	取締役社長
"	笹原 正徳	(株)和楽美容室	専務取締役
"	菅原 昌昭	(株)菅原電気	代表取締役
"	高瀬 幸忠	(株)インテック	常務執行役員北陸地区本部長
"	武田 英俊	日本銀行富山事務所	事務所長
"	田村 元宏	(株)タムラ設計	代表取締役
"	寺下 利宏	(株)ソシオ	代表取締役
"	永井 秀宗	(株)寿板硝子	代表取締役
"	鍋嶋 範和	(株)広和	取締役社長
"	新田 八朗	日本海ガス(株)	取締役社長
"	林 和夫	朝日建設(株)	取締役社長
"	細川 泰郎	細川機業(株)	取締役社長
"	堀田 信一	日本海ソーリスト(株)	取締役社長
"	松本 重夫	北陸電機製造(株)	取締役社長
"	村尾 千尹	(株)村尾地研	取締役会長
"	山口 輝男	北酸(株)	相談役
"	山野 昌道	(株)チューリップテレビ	専務取締役
"	米屋 保雄	(株)キタイチ	代表取締役
"	林 広森	富瀨国際事業協同組合	専務理事
担当役員	牧田 和樹	(株)牧田組	取締役社長

(40名：平成29年3月現在)